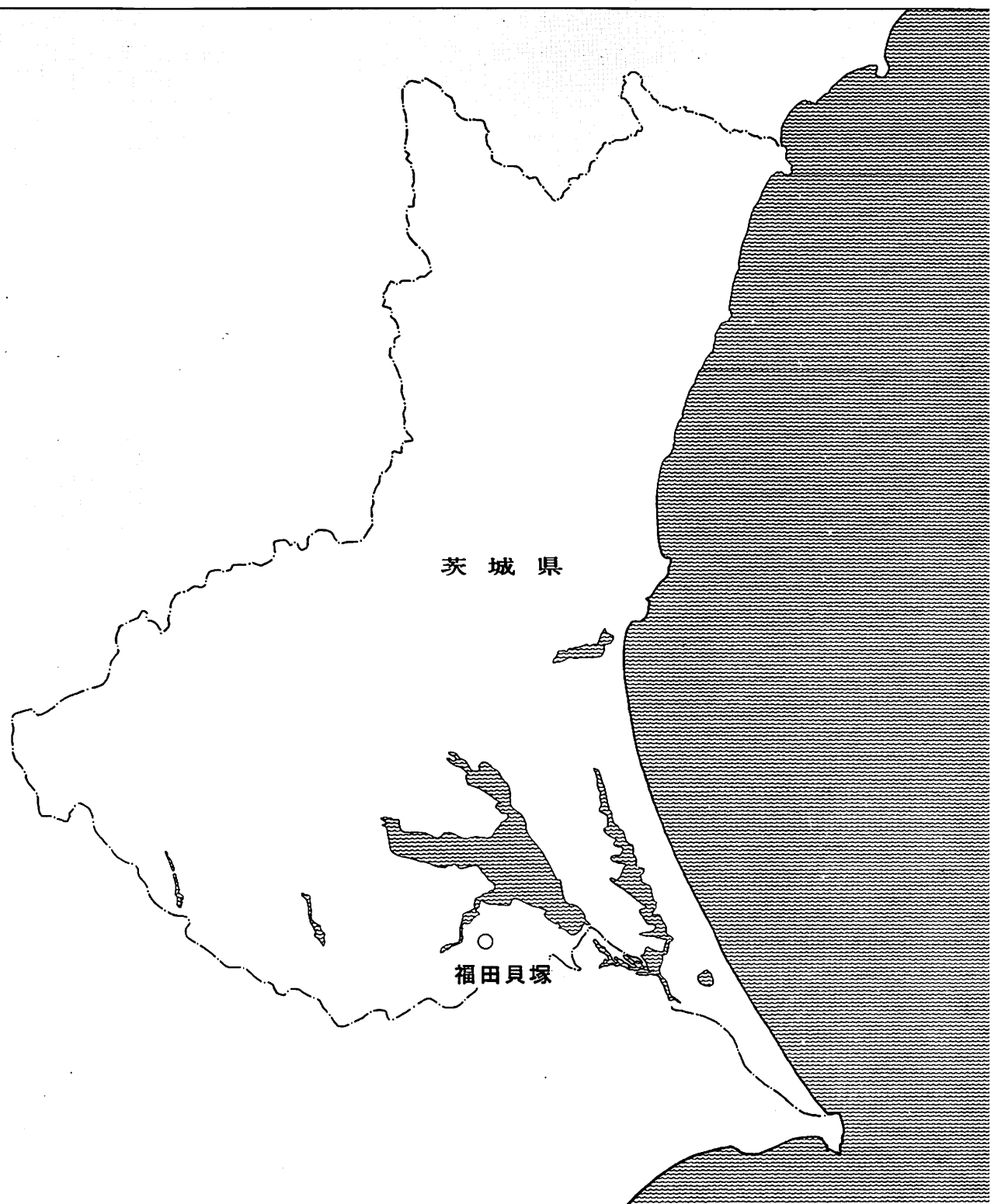


茨城県東村

# 福田貝塚発掘調査概報



1972

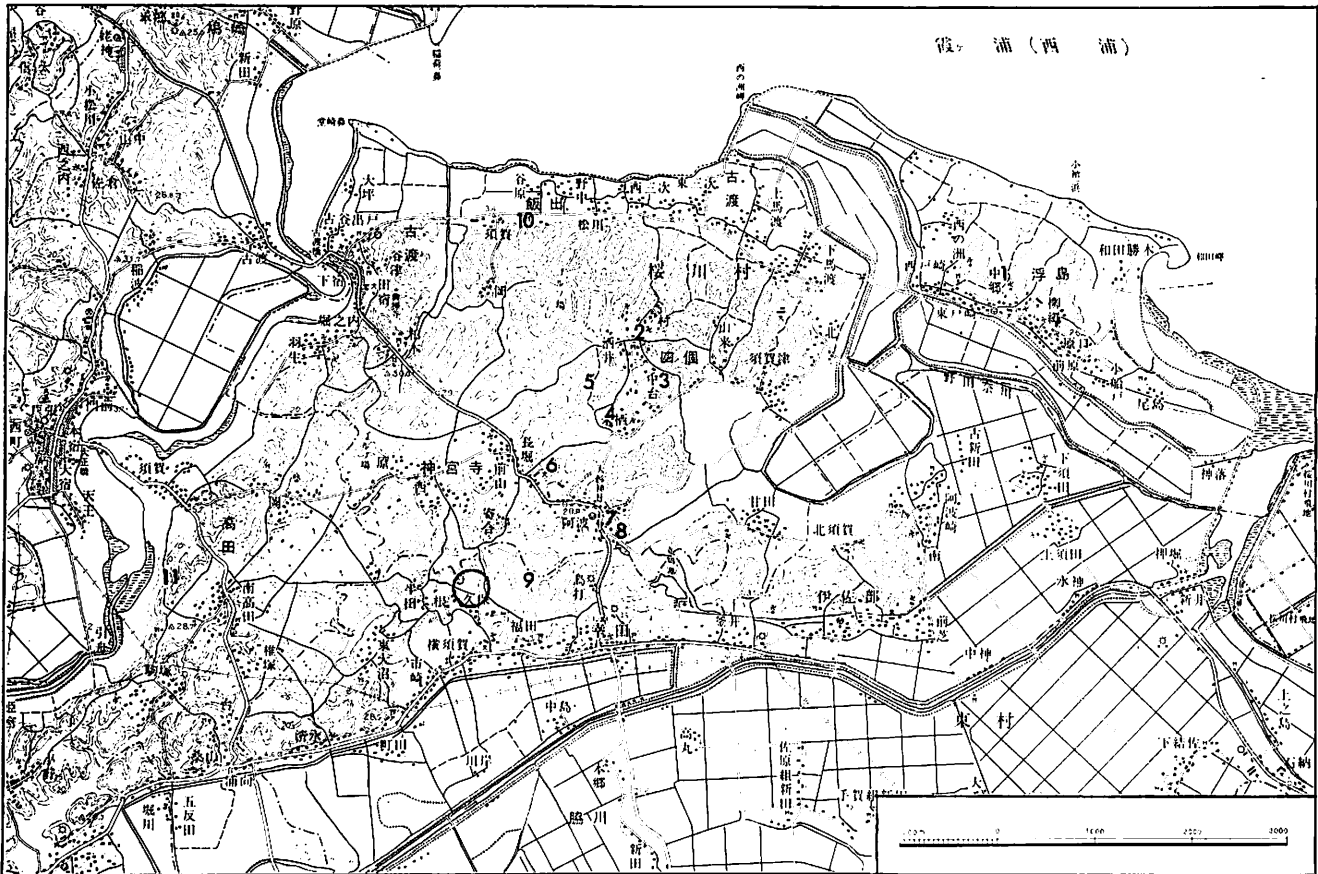
平安博物館

## は し が き

茨城県稲敷郡東村福田に存在する本貝塚は、縄文時代後期の堀之内、加曾利B式を主体とする時期の遺跡であり、その発掘調査は平安博物館が小平記念館より依頼されて実施するところの、『茨城県下における考古学的調査』に基づくものである。

日本考古学史上茨城県の果たした役割は非常に大きい。学問の中心東京に近いという地理的条件に加えて、特色ある文化が古代において大いに繁栄したことに最大の理由がある。しかし現時点にたつて顧みると、学問の体系化を個別分野において急いだあまり、体系的・総合的な調査においては不十分なところも少なくない。このため今日の眼をもって、特に未解明な分野を重点的に調査することが本調査の主目的である。

本年度はその5カ年計画の第1年度として、霞が浦をめぐる全国有数の貝塚地帯にメスを加えるため、とりわけその地域的特色を顕著に反映している縄文時代後期の貝塚を発掘すべく、特に明治時代以来あまりにも有名になりながら、逆にその実体が不明であった福田貝塚が選定されたのである。



### 福田貝塚の位置と周囲の遺跡

福田貝塚(○印)は霞が浦南岸の阿波丘陵上に位置する。本丘陵には多くの縄文時代貝塚が分布し、主要なものを上図に示した。名称・時期等は次の通り。なお諸貝塚が、丘陵南の旧海岸線(現利根川沖積平野)でなく、桜川村と東村とに挟まれた小平野(旧湾)の周辺に形成されていることに注目される。

1. 浮島貝塚(前)
2. 村坪貝塚(中)
3. 大門貝塚(中)
4. 大室貝塚(中)
5. 所作貝塚(前)
6. 天神台貝塚(中)
7. 石神下貝塚(前～後)
8. 竜貝塚(後)
9. 大畑貝塚(中)
10. 広畑貝塚(後～晩)
11. 権塚貝塚(後)

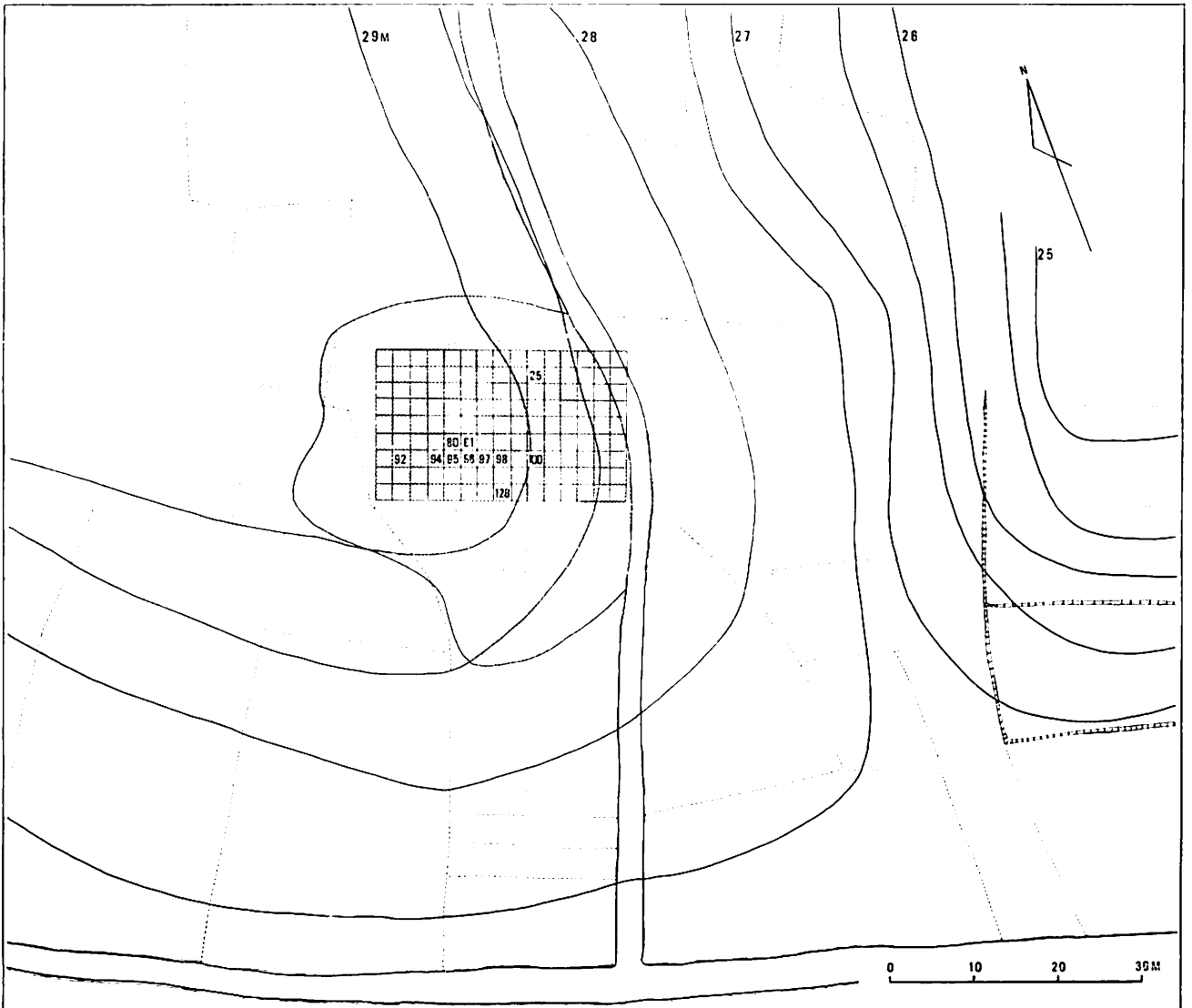
## 発 掘 調 査

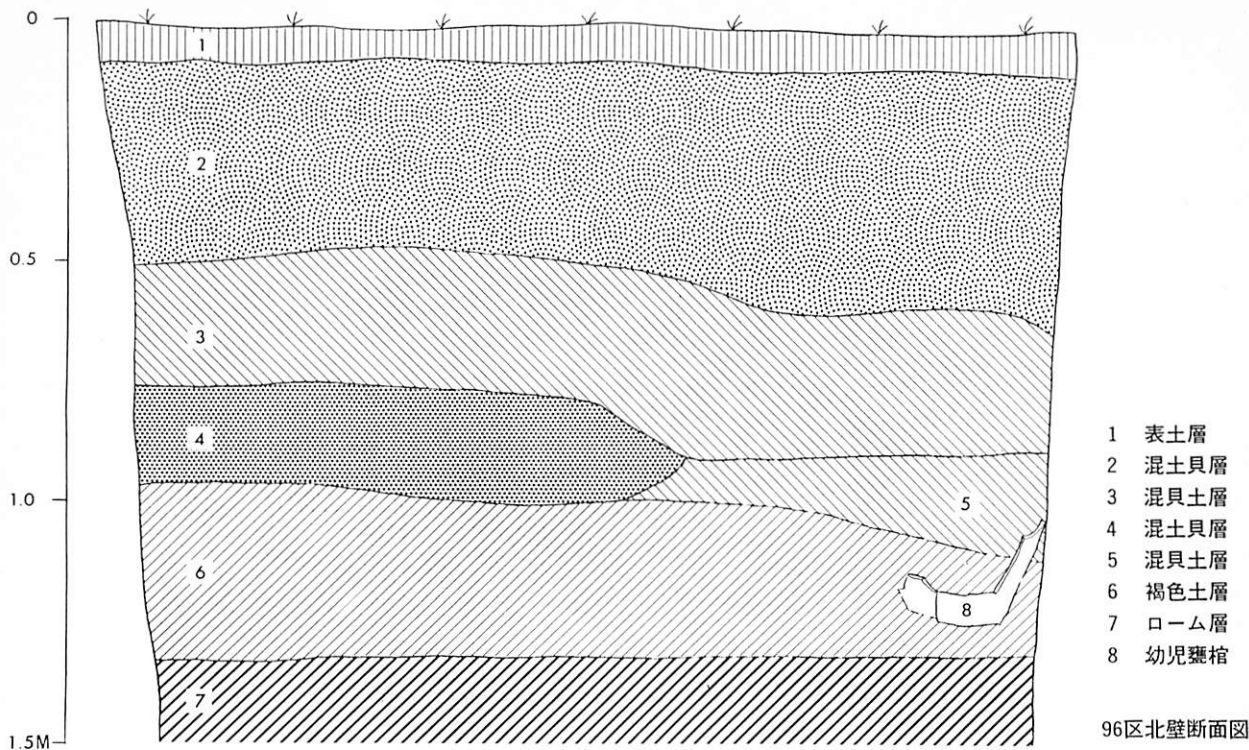
福田貝塚は阿波方面より浸入した北側の谷（旧入江）に臨む台地上に位置し、台地の四周に配された4小貝塚群より成り立っている。このうち東北部の字神明前と西南部の字薬師台とにある2貝塚がやや大きく、明治時代以来江見水蔭・佐藤伝藏・高島多米治等々の諸先学によって幾度となく発掘され、夥しい遺物の出土をもって有名である。

今回の発掘は佐久間泰一氏所有の字神明前1675番の7所在畑地において、昭和46年11月20日より12月5日までの16日間実施した。承諾を得た畑地全域に2m四方のグリッドを135区設定し、貝塚中心部を主に11区（実測図中に区名の数字を示す）発掘した。貝塚の形成は80—96区付近を主とし、畑地の盛り上りもこの辺りが著しい。ただし25区は土器のみの包含層で、貝殻は表土層にのみ散布しているにすぎない。したがって現在の貝殻の分布範囲（点々内）に対して、貝塚の範囲はかなり狭いと考えられる。

神明前・薬師台の2貝塚は共に縄文後期の堀之内・加曾利B式期の貝塚である。他の2貝塚については、同時期であることの確認が行なわれていない。

遺 跡 地 形 実 測 図





貝層の形成 最も標準的な層序として、96区北壁の断面図を図示した。

第1層 表土層で、厚さ約 15 cm。畑の耕作土である。

第2層 上部貝層で、厚さ 40—50 cm。加曽利B式を主体としたらしいが、過去の発掘で壊滅状態にあり、堀之内式・安行式の混在も著しい。25区を除く全域に分布する。

第3層 間土層で、約 30 cm。加曽利B式を主体に堀之内式を混じる。地区によっては本層も攪乱をうけている。

第4層 下部貝層で、約 20 cm。堀之内式を主にする処女層である。しかしその分布は80—90区付近に限られ東方には拡がらない。

第5層 第4層の併行層であり、同様に堀之内式を主とする。

第6層 貝層下土層である。第4—5層に接する面に遺物が集中して出土する。本層中に甕棺と炉址が検出された。甕棺は底部を打ち欠かれており、口縁部は欠失している。内部より幼児骨が検出された。96区東北隅出土。炉址は97区から98区にかけて検出。楕円形で東西長径 125 cm。ただし住居址とする積極的な証跡は認められなかった。

第7層 地山のローム層であり、遺物は全く含まれていない。



甕棺出土状況 (96区)



炉址 (97—98区)



80区における土器出土状態

円筒形土器出土状態(95区)

深鉢形土器出土状態(81区)

灰のつまった土器 (80区)

注口土器出土状態 (96区)

土製蓋の出土状態 (81区)

全て下部混土貝層及び混貝土層出土の堀之内I式土器である。他型式の土器は攪乱を受けた層から出土しており、写真になるような出土状態ではなかった。



出土土器 下部の貝層から出土するのは後期前葉の堀之内Ⅰ式であり、貝層下土層についても同様である。上部の貝層は後期中葉の加曾利BⅠ・Ⅱ式を主とする。間土層は両者を混じるが、詳細な検討を要する。堀之内Ⅱ式はあまりみられず問題があると思われる。上部貝層はすでに記したように全く攪乱されているが、加曾利BⅢ・曾谷・安行Ⅰ式等は少ない。そして安行Ⅱ式がやや目立ち、晩期前葉の安行ⅢA・ⅢB式も出土する。本来貝層を形成したのか否か問題が残る。この安行ⅢB式が本貝塚の下限である。



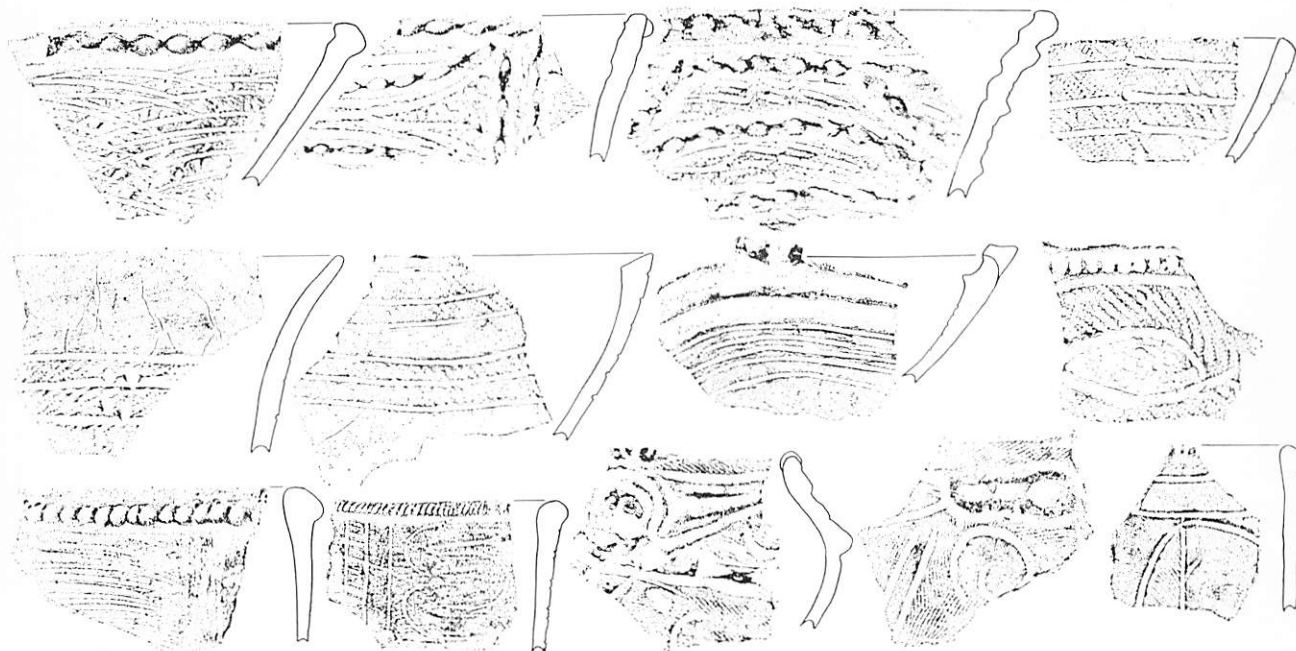
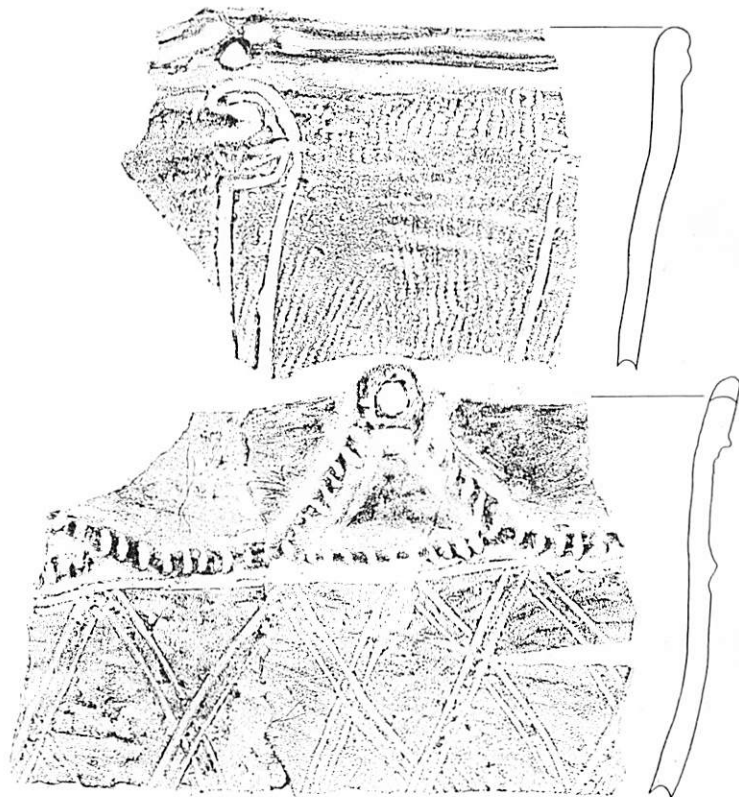
堀之内Ⅰ式土器（95区下部混土貝層出土）

出土土器片拓影（縮尺 1/3）

上2段 堀之内Ⅰ式土器片

中2段 加曾利BⅠ・Ⅱ式土器片

下段 安行ⅢA・ⅢB式土器片



貝層の構成要素・貝類 貝層を構成するものは、食料の残滓と各種の遺物である。食料残滓のうち最も多いのは、その名称のごとく貝類である。その種類と比率について単位体積当りの数量を算出したのが下表である。ハマグリ・シオフキ・ユウシオガイ等の内湾砂泥性の二枚貝が圧倒的に多く、外洋の岩礁性貝類の少ないことから、北側の水田が往時の内湾の入江であったことが知られる。例示した81区ではたまたまユウシオガイの多いところに当たったため一般性が問題になり、両層の詳細な検討は今後の課題である。ただ注目されるのは、表示しなかったが第4層では陸産貝類の稚貝が無数にみられる一方、第2層ではほとんどみられなくなり、集落の変遷を考える上に示唆的である。

貝層を形成する貝類の構成比表 (81区)

層位 時 期	種 名	第 4 層 堀之内式		第 2 層 加曾利B式	
		個体数	%	個体数	%
双 殻 類	サルボウ	41	2.33	77	9.44
	ハマグリ	123	6.99	395	48.41
	オキシジミ	3	0.17	7	0.86
	カガミガイ	1	0.06	0	0
	アサリ	14	0.80	30	3.68
	バカガイ	0	0	1	0.12
	シオフキ	281	15.97	95	11.64
	マテガイ	75	4.26	0	0
	オオノガイ	3	0.17	43	5.26
	ユウシオガイ	1150	65.34	110	13.48
ヤマトシジミ	1	0.06	7	0.86	
	小 計	1692	96.15	765	93.75
腹 足 類	アカニシ	0	0	5	0.61
	イボニシ	2	0.11	0	0
	ツメタガイ	0	0	1	0.12
	ウミニナ	33	1.87	7	0.86
	カワニナ	2	0.11	0	0
	アラムシロ	17	0.97	7	0.86
	小 計	54	4.06	20	2.35
陸 産 貝 類	マイマイ類	2	0.11	8	0.98
	キセルガイ類	12	0.68	23	2.82
	小 計	14	0.79	31	3.80
	計	1692	100.00	816	100.00

註1 腹足類は左右の最大値をとる。

2 各ブロックの体積は、第4層が30×30×20 cm、第2層が30×30×30 cmである。



マテガイの密集状態 (81区下部混土貝層)



サルボウ



アカガイ



ハマグリ



カガミガイ



オキシジミ



バカガイ



アサリ



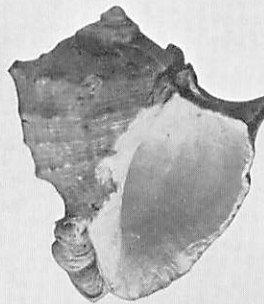
ユウシオガイ



ヤマトシジミ



シオフキ



アカニシ



ウミニナ類



イボニシ



カワニナ



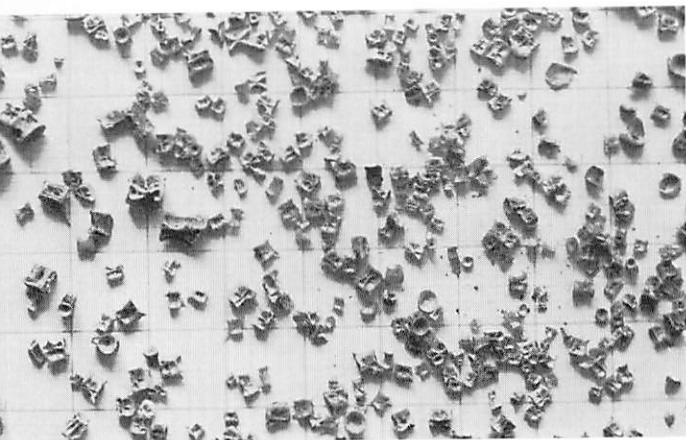
アラムシロ



キセルガイ類

貝層を構成していた主な貝類 (縮尺 1/2)

貝層の構成要素・獣魚骨 貝類以外の食料残滓も少なくない。同じ内湾でとれた魚類として、マダイ・クロダイ・スズキ・フグ類・ヒラメ・エイ類等々が知られている他、写真で示すように2mm位の脊椎骨が1ブロックに1000個以上も検出され、まだ種名の同定が行なわれていない。イワシ類等の小魚類であるらしい。獣骨としてはシカ・イノシシの他にタヌキ・イヌ等の遺存骨がみられる。



種名検討中の小脊椎骨（線は1cm間隔）



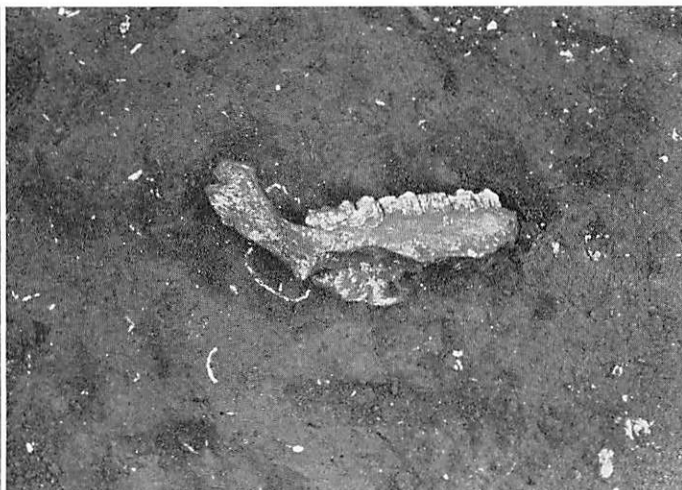
上左 マダイ前顎骨 I      上右 マフグ類下顎歯板 r  
下左 クロダイ前顎骨 r      下右 ヒラメ下顎歯骨 I  
(実大)



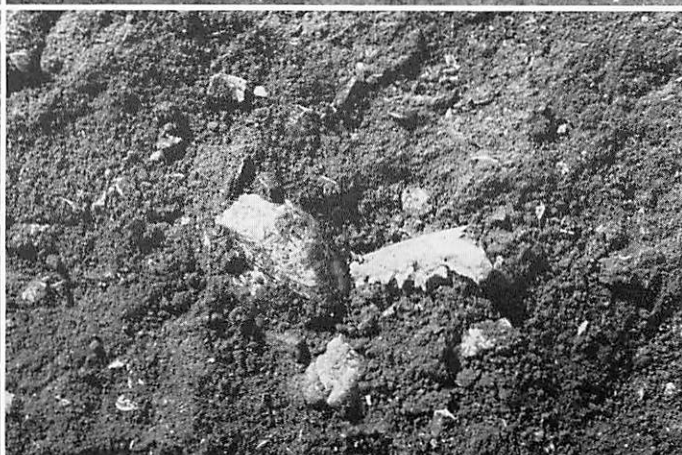
魚類脊椎骨（左より タイ類・スズキ・サメ類, 実大）



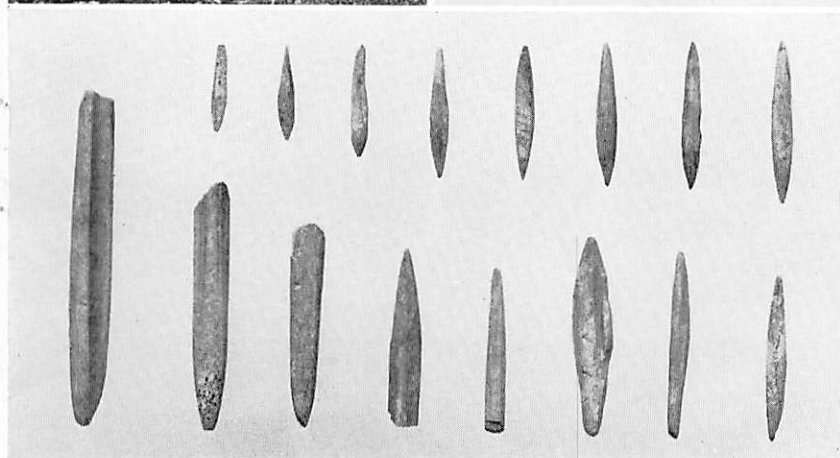
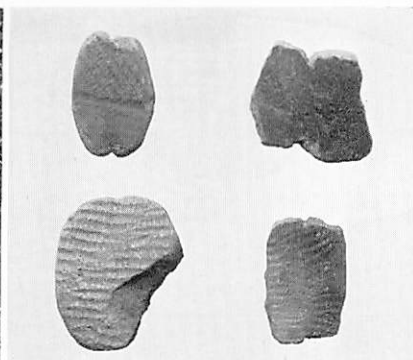
左上 切截痕のある鹿角の出土状態  
左下 タヌキ下顎骨出土状態



右上 イノシシ下顎骨出土状態  
右下 イヌ下顎骨出土状態







有溝土錘出土状態  
骨製ヤス (左端 8.5 cm)  
土器片錘 (左上・長径 5.3 cm)

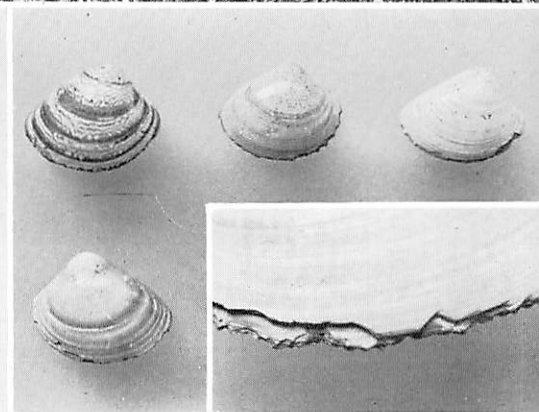
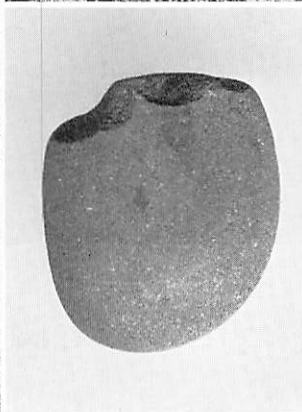
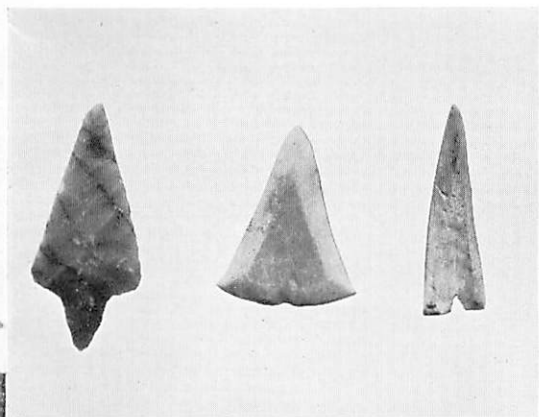
遺物 漁具として釣針 1 点が出土しているが、圧倒的に多いのは骨製のヤスである。シカの中足骨等で作られたもので、約 100 点出土した。上部貝層に多いが、下部貝層にも少なくない。下部貝層ではこの他に有溝土錘・土器片錘等が出土しており、上部貝層と異なる。こうした漁具の変遷が魚類の変遷とどういう関係があるのか注目される。

これに対して狩猟具はあまり多くない。石鏃 1 点と牙鏃 2 点である。上記骨製ヤスが使用された可能性もあろう。また弓管状鹿角製品も 1 点出土した。

植物質食料は残りにくいため不明であるが、粉食と関係がある石皿、たたき石等も出土している。

他に礫器やスクレイパーと称される貝刃も多数出土している。

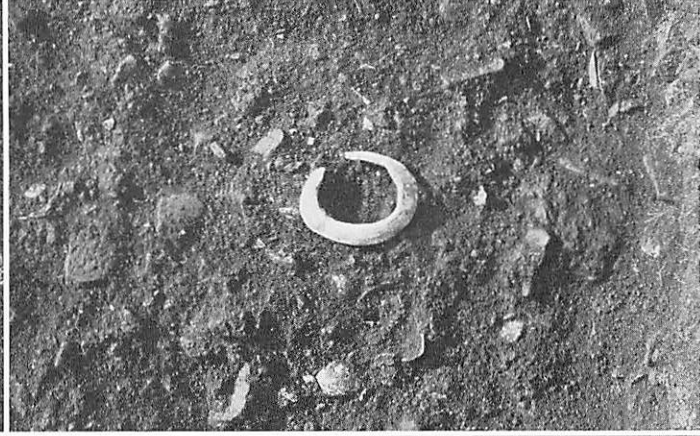
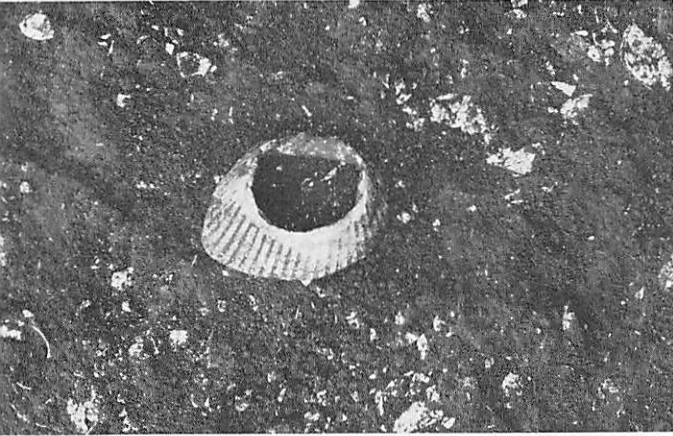
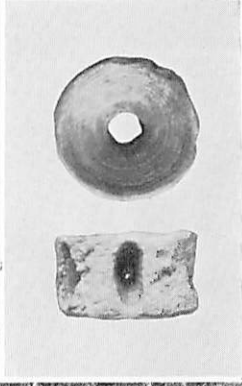
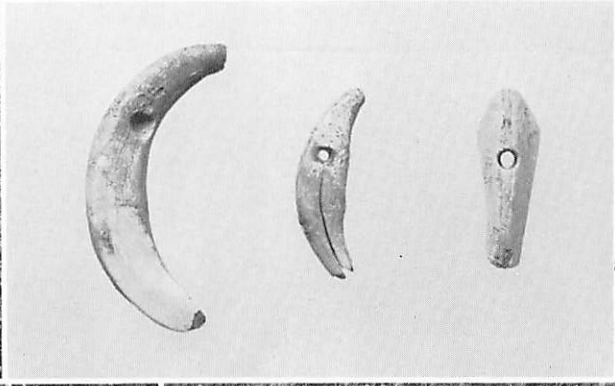
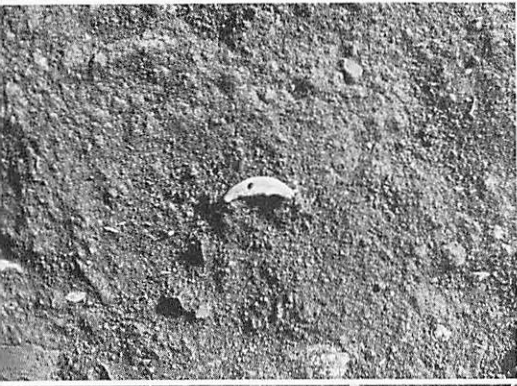
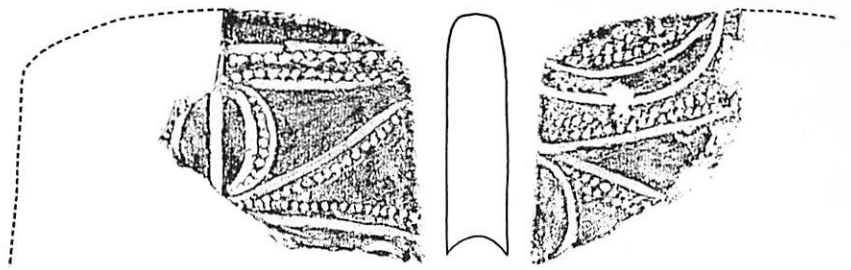
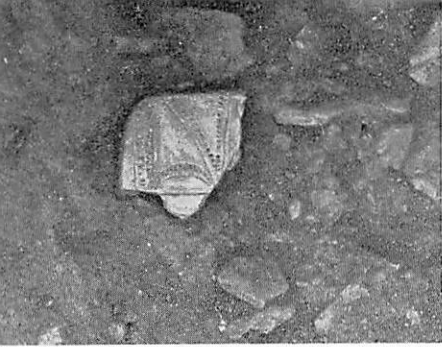
これらと土器以外の遺物としては、次頁に示したような各種の遺物がある。土版の他図示していないが少量土偶の破片が出土している。貝製腕輪やイノシシ・イヌ等の牙製垂飾具もみられ、当時の習俗を伺わせる。



石鏃及び牙鏃 (石鏃 3.6 cm)  
たたき石出土状態

骨製ヤス出土状態  
礫器 (長さ 9.6 cm)

弓管状鹿角製品出土状態  
貝刃とその刃部 (上段左端横径 6.6 cm)



土版出土状態

土版拓影(縮尺 1/2)

牙製垂飾具出土状態

牙製垂飾具(右端 3.3 cm)

サメ類脊椎骨利用の垂飾具(縮尺 1/2)

アカガイ製腕輪出土状態

ベンケイガイ製腕輪出土状態

円盤状土製品出土状態

孔のあけられたパイの出土状態

福田貝塚が縄文文化研究史上に果たした役割には非常に大きなものがあり、その著名なことはいまさらいうまでもない。本貝塚を含め阿波丘陵の諸貝塚群を江見水蔭は『貝塚研究のイエルサレム』と称したほどであり、それだけに多くの諸先学の調査を受け破壊は進んでいる。たしかにその結果として後期縄文文化の文化内容はかなり判明した面もあり、それなりの研究水準の向上に資するところのあったことは確かである。ただそれは今日の眼をもって見れば側面的であったといわざるを得ないし、抽出された遺物の豊富さに比べれば、遺跡の実体はあまりにも未解明のままであった。その一例をあげれば、この貝塚の層位図が一葉たりとも公表されたことのないことを指摘できる。まして貝塚でありながら、その漁撈活動については触れられていないのである。

今回のわれわれの調査によっても、上記のような側面的な研究の危険性は明白であった。加曽利B式期の貝層は処女層を全く残してはいなかったが、遺存していた魚骨は夥しく、骨製ヤスも百点近く検出されたのである。堀之内式期にもすでにヤスは出現しているが量は少ない。これに代わって土器片錘・有溝土錘がみられる。漁網錘と骨製ヤスとの関係、及びこれらに対応する魚種との関係は、今後本報告に備えて大いに検討に値する課題である。狩猟活動・植物質食料採集活動についても同様である。

ただし過去の調査によって特に集中的に失われた土偶等から伺える精神文化については、未解明のまま残される公算が大きい。将来こうした課題は福田貝塚群を残した集落址の発掘等によって補いながら復元しなければならないであろう。神明前貝塚・葉師台貝塚等に囲まれた台地中央平坦面で、従来土器塚とよばれた地域はこうした見地から再検討する必要がある。もっともこうした必要性は本貝塚に限ったことではなく、すべての貝塚調査についてもあてはまることである。また周辺の遺跡との地域社会の形成のあり方も注意されねばならないし、さしあたってこの前段階の貝塚であると推定される東方の大畑貝塚を調査する必要がある。阿波の湾を囲む入江ごとの漁場の復元、阿波丘陵の広い平坦面における狩猟・採集圏（初期農業の可能性を含めて）も復元していかなければならないであろう。

こうした作業の前提として、多くの困難な問題を伴いながらも今回調査した神明前貝塚について、徹底したモノグラフを作成しなければならない。その結果を本報告書として速やかに公刊したいと思う。

発掘から整理作業へとの一連の作業過程において、館員の渡辺、片岡等の他に、川端敏史、小池史哲、山岸良二、長谷川豊の4氏には特に熱心な協力を頂いている。銘記して謝意を表する次第である。



記念撮影

## 参加者氏名

渡 辺 誠 (平安博物館考古二課)  
片 岡 肇 (平安博物館考古二課)  
鈴 木 忠 司 (平安博物館考古一課)  
峰 巍 (平安博物館 嘱 託)  
田 中 正 昭 (京都大学動物学教室)  
山 崎 純 男 (福岡市教育委員会)  
木 村 幾多郎 (九州大学大学院)  
中 岡 昇 (九州大学文学部)  
小 池 史 哲 (別府大学文学部)  
川 端 敏 史 (同志社大学文学部)  
長谷川 豊 (同志社大学法学部)  
榊 原 芳 久 (南山大学大学院)  
鈴 木 克 彦 (国学院大学大学院)  
熊 谷 常 正 (国学院大学文学部)  
小 野 美代子 (国学院大学文学部)  
鈴 木 美千子 (慶応義塾大学文学部)  
山 岸 良 二 (慶応義塾大学文学部)

□参加協力された以上の諸氏をはじめ  
発掘調査を快よく許された佐久間泰二  
氏、及び茨城県教育委員会・東村教育  
委員会に対し、衷心より謝意を表する  
次第である。

### 茨城県東村福田貝塚発掘調査概報

発行日 1972年3月31日  
編集者 平安博物館考古二課 渡 辺 誠  
片 岡 肇  
発行者 平 安 博 物 館  
京 都 市 中 京 区 三 条 萬 倉  
販 售 京 都 8 5 0 番 電 話 0 7 5 ( 2 2 2 ) 0 8 8 8  
頒 価 3 0 0 円 (送料共)